

いわゆる述斎偶筆の自筆本とその展開

宮崎修多

江戸幕府の文教ならびに外交をつかさどる旗本家の一として、林大学頭（三千五百石、若年寄支配）は存在した。譜代大名である美濃岩村藩松平家から入籍して、その林家の八代目を襲った林述斎（一七六八―一八四二）は諱衡（はじめ乗衡）、字叔純、通称大内記、述斎あるいは天瀑山人と号し、芭蕉の木を愛したがゆえに蕉軒、蕉隠などと別号する。かれは老中松平定信の善き理解者あるいは政策助言者として、経学文事の鼓吹のみならず多くの官製の編纂物や出版物の発議、あるいは文化八年朝鮮通信使の対馬における応接など、政治的にも手腕を発揮する。江戸の都市機能が整い、東西日本の文化が混交して華やいた末に、それがほとんど爛熟して朽ち果てたものとしていた徳川家斉時代。かれはその風儀を一身に体した文人官僚であった。この述斎が官暇につづった長短の和文の一群を、明治以来「述斎偶筆」と呼ぶことが一般的になっているが、それは写本で行われていたこの

作品に注目した成島柳北が、自ら編集する花月新誌に分割掲載した際、その初回（明治十年五月二十九日発行、第十一号）の標題として「述齋偶筆ぬきかき」と付けたことが専らの原因である。しかしこれは柳北による仮題に過ぎず、新誌第四十号掲載時など「述齋隨筆」と題しているところからみれば、仮に「偶筆」と称する写本が存在していたにせよ、幾分恣意的な命名であったことが推測されよう。連載第一回にみえる柳北の引語は次のようなものであった。

述齋林先生は道春翁より林氏（マコト）十余世の間に於て其の徳望學術並び無き人なり。佐藤一齋翁も其の門に出でたり。著書多けれど知る人罕なれば、柳北が幼き時写し置きたる偶筆を抄して、世の雅流にしめす。

*句読は私に附した。以下引用は皆同じ

この花月新誌掲載本文を一本に翻字したものに、明治二十四年三月刊行の和装活版「やまと叢誌」（養徳公編）所収本、それと明治四十三年九月刊行『隨筆大観 第二』（梅園謙編、国書出版協会刊）所収本の二種あり、これらが「述齋偶筆」の普及にもっとも寄与したものと考えられる。条々の配列、表記や誤記など本文の様態から勘案しても、明らかに花月新誌掲載本文を底本としてその分割掲載順のまままとめた出版物であった。近代読書人の「述齋偶筆」観は、ほとんどこれら活版本によって形成されたといつてよいのである。巷間たまにみかける「述齋偶筆」と銘打つ写本も、全てこの花月新誌本文を合写した近代写本であり、柳北旧蔵本とおぼしき近世写本には、今のところ出会ったことはない。ただ、この隨筆を心から推奨してやまなかつた森銚三のみは、その解題的文章のなかで、これらとは系統を異にする近世写本の存在を、静嘉堂文庫蔵の『了語』に言及することで、早くより示唆していた。*注¹

もつとも花月新誌の底本を、この掲載順の本文を備えたものとして想定するのは的外れなことかも知れない。先に述べたように花月新誌で柳北は「述斎偶筆ぬきかき」と題して連載を始めた。その各号の発行された季節や、同じ号に掲載されている詩歌文章の内容に因んだ文章を、「幼き時写し置きたる偶筆」からアトラダムに抜き書きし、それを三年にわたって小出しにしていた、ということも充分考えられるのであって、そうであれば当然、各条の順番など問題とすべきではないからである。

さて、森銑三も暗示していたように、これら活版本の本文とは異なる、写本の和文随筆集として『林氏遺草』（九州大学附属図書館萩野文庫蔵、写本一冊）、『了語』（静嘉堂文庫蔵、写本一冊）、『蕉雨軒偶筆』（無窮会図書館内田遠湖旧蔵、写本一冊）、『春初筆記』（国立国会図書館蔵、静嘉堂文庫蔵、各写本一冊）などがある。これはみな本文第一条が「春のはじめ、残る寒さはげしく、折々雪もふる、年にかはらぬけはひのうちに：」で始まるものとなっており、「いにしへの歌詞ほど風韻高きものはあらじ：」の条を冒頭に置く花月新誌系の本文とは、あきらかに異なる話群また話順であった。また、花月新誌に掲載されない条のいくつかがみられることも、異同の大きい点である。

右はすべて近世後期から幕末にかけて作られたと思しき写本群であるが、そのうちもつとも注目すべきは九大萩野文庫蔵の『林氏遺草』美濃判写本一冊であろう。静嘉堂本『了語』は、この忠実な写しのごとくである。その他の諸本の前半部にあたる、半分ほどの話数しか収められないものの、写本制作時には一応これで完結した形であったらしいこと、巻末に「ひかる」による書写識語が置かれていることから分かる。識語を左に示しておく。

壬辰の長月末の四日、雨しつかなる時、午過る頃筆をとりて、申の半はかりにうつし終りぬ

ひかる 識

天保三年壬辰の九月二十四日、静かに雨のふる日の午後十二時過ぎ（午過）から筆写を始め、午後五時（申の半はかり）頃擱筆したと「ひかる」は記す。前半だけの筆写ならば、わざわざこういう言い方はしないだろう。この一冊を約五時間で筆写し終えたというのも、当時の写本がいかなる速度で作られていたかを示す貴重な証言であるが、これが「ひかる」によって記されたということも、該本の重要性を増す要因となっている。すなわちこの写本は著者述齋の三男で、のちに九代大学頭となる林禮宇、名號ひかるの手になると考えられるからであり、天保三年はまだ父述齋が存命、恐らくは父の和文章稿類を整理して一本にまとめ、ひとまずここに区切りをつけたか、あるいは父自身が作った手稿を借りて写したか、そのどちらかということになる。いずれにしても著者の膝下で作られたらしいこの写本は、他本に比して信頼できる本文をもつこと、いうまでもない。

ところが、そのことを裏付けるさらなる善本が、このたび見出だされた。それは他でもない、この『林氏遺草』とまったく同じ話群と分量をもつ、著者述齋の自筆稿本である。その出現により、『林氏遺草』成立について右に挙げた可能性のうち、後者なることをほぼ確定しうる。すなわち、述齋自身によって一定数の話群をまとめられたものが既に存在し、「ひかる」は天保三年九月二十四日、窓外しめやかに降る雨を眺めながら、それを五時間かけて書写したということであった。そして検討の結果、この自筆稿こそが「述齋偶筆」初発の本文、いわば原「述齋偶筆」とでもいふべきものであり、この時点から著者自ら関与していたことが判明したのである。

あらためて自筆本の体裁を紹介する。半紙本（22・4×15・6 糎）稿本一冊。後補の丹表紙左肩に無粋の題

簽あり、「述斎先生自筆記」と墨書。四針袋綴。*写真1表紙を捲ると一丁無地の遊紙（後補）が挟まって、次に本文

紙と共紙の、そしてこれが元の表紙らしき一丁あり。本文三十四丁。その後にはやはり共紙を使った元の後表紙一丁があり、遊紙（後補）一丁、そして後補の後ろ丹表紙となる。本文と元表紙はすべて同じ黒色印刷罫紙（楮

紙）が使われ、黒魚尾単枠有界八行。匡郭の内径は13・8×9・5糎、半紙本にしては罫がいささか小ぶりな寸法で、その分ゆつたりと余白のある、いかにも大名家出身者らしい大らかな自家用罫紙である。後表紙に使われ

た共紙の罫紙には、冒頭第一条の「春のはしめ残寒はけしく…」を二行だけ書いた反古が使用されており、いかにもこれが著者の机上で作られた稿本であることを思わせる。元の体裁は、恐らく覆表紙のない紙縫による仮綴

じ本であったろう。引語や識語の類が一切見られないことにも、どこか述斎らしい潔さを感じるが、この稿本で甚だ残念なのは、裏打ちこそされているものの、虫損その他による破れの酷いことである。とくに本文第一丁か

ら二十四丁目までオモテの左上、ウラの右上のコーナー部分が毎丁欠損しており、きわめて判読に苦慮する。本文は、柳葉が風にたゆたうような伸びやかな述斎特有の筆蹟で、行草漢字と平仮名の混交表記。しかも全丁まっ

たく筆の調子変わることなく、訂誤の跡も僅かしかない美麗な字面であることは驚くべきで、かれ一手で短時間のうちに清書されたものとみえる。朱筆圈点の類も全くない。

本文翻刻に先んじて、その伝来についても一言しておく。本書は中野三敏旧蔵本。蔵書印は元の共紙表紙オモテに「石井／文治」（朱文方印）「石井／□治」（白文方印）「凌霄書／屋所蔵」（朱文長方印）の三顆。石井某に

ついては聞くところがないが、本書とともに帙に封入されていた養徳会活版本の抜刷にも「石井／文治」印は捺されている。この抜刷には他に中川得楼のあの小さな丸印もあって、そのどちらかの手によってか、あれこれ異

同が書き込まれているから、この石井も明治以降の人物であることは間違いない。凌霜書屋は作家永井荷風の盟友として知られた文人肌の実業家、相磯勝弥（号凌霜、一八九三〜一九八三）の書室名。後補題簽の文字は非常に達筆だが、これも相磯氏の命により書家が筆を執ったものか。ただし平生から述斎の著述類に気をとめていた荷風山人が、その著述中で親友所持のこの一本に言及していないのは、相磯氏の入手したのが山人没後だったためではあるまいか。泉下に切齒するかれの表情が見えてきそうである。

《翻刻》

凡例

- ・以下に中野三敏旧蔵本「述斎先生自筆記」一冊の全文を翻刻する。
- ・字体はほぼ現行のものに統一したが、清濁は原文のままにした。
- ・僅かな訂補箇所は、訂正後の本文に従った。
- ・原文には一切句読の類が施されていないので、適当に読点を附した。
- ・「」内は原本の破損部分で文字の見えない箇所を示す。この部分に関しては、もつとも近接した本文をもつ九大萩野文庫蔵『林氏遺草』によって文字を補填した。
- ・原本の丁替わりを（ ）に入れて洋数字カタカナで示した
- ・便宜上、一条ごとに通し番号（洋数字）を冠した。諸本によって条の切れ目に多少異同はあるが、ここでは極力原本の改行を重んじている。
- ・*以下に『林氏遺草』や広本系本文で改められた主要箇所を示した。

- 1 春のはしめ、残寒はけしく、折々雪もふるとしにかはらぬけはひのうち、いつとなく日さしうるはしく、遠山いさ、か霞そめ、池水や、みとりに、また芽もふかぬ柳の糸のゆらくとやはらかに、楓の枝先あかみ出、常盤木の色のみか、「諸木の皮さ」へ光沢を帯て生意ふ（1オ）「くめるを見」るころよりは、老の心も若やく計にこそおほゆれ、わらはへのもてあそふ風箏の音も、いとほるめきたるものそかし、
- 2 瑞香迎春は灌木なれば、一もと二本にては見所なし、多くあつめて植れば花少き時の美観なり、まして瑞香は色のみか其香の遠く聞ゆ（1ウ）るも、またたくひあるへからず、梅は冬より咲つ、けと、雪にあへるはうるはしからず、春に入てやうく／＼にさき出る種にしかず、一重より次第に八重にうつり行もめてたし、一重とても思ひのほか盛久しきものにて、桜にくらふれば、めつる日数あまた「あり、これぞ」長閑けき花のはしめ（2オ）「成ける」、
- 3 すへて盆栽はこのまじからぬものから、香にて建蘭、茉莉、色にて仏桑、楨桐などの寒を畏るものは盆に上す、其余は只梅計成へし、さへかへる春寒いとはけしく、おろしこめてあるときは盆梅なかるへからず、夜は屏帷の内へも置て夢（2ウ）さむる時、枕にかほり来る風情たとふるものなし、又福寿草さ、やかなれと、春しりそむる花なれば一二盆かくへからず、唐花の桃桜はときに違ひてこちたし、西土にて燈節に牡丹（「丹」にミセケチ傍点）芍をもてあそふは奇巧といふへけれど、このまじからぬ事にぞ、籠「にかふて冬」鶯をなかせ、春ほと、きす（3オ）「をきくたく」ひならずや、
- 4 梅は大瓶に多くさしてしはく／＼水を換ふれ、凡二三十日は保ちて観に堪たり、水仙も同し、こは盆に土なく小石もて植、水にて養へは、瓶よりも猶長きに堪るものなり、

- 5 古しへの歌詞ほと風韵高きものはあらし、梅に下風といひ、萩に（3ウ）上かせといふ、いかにしてかく思よりけん、
- 6 雪中の梅を、色はまかへとかにしるき、など言は空言なり、ゆきつもれは花はうすきに見え、香はとちてなきものなり、雪はれ日かけあた、かになれは香气出つ、そはしれたることなれと、空言にいふか歌詩の妙処也、この趣を「解されは、理」窟におちて、詩もうたも出来（4オ）「ぬなるへし」、因みにいふ、亡友仁正寺市橋侯、桂樹を数多植て黄雪園と号せしか、一年その花の盛に、月の夜ころに逢たりとて招かれたる折ふし、爍のならひ、天気変更して晴陰さたまらさりしに、月出れはかほり、月かくれは香なし、かつらを月に縁あるものといへと、さにはあられて、きの（4ウ）開塞によるなり、予席上二詩を賦してその事をいひしか、思ひ出せははや三十年前のむかしとなりぬ、
- 7 梅林のかたはら、必山茱萸を植へし、時を同しくして色をことにする見処あり、但し此木秋に入れば、其葉くものゐの如くなりていとほし、又黄花早「きは連翹なり」、糸ほそくたる、種よし、（5オ）「春深きころ」尤めつへきは菜花也、蒲公英さ、やかなれと又よし、
- 8 一年行遊の楽しみは、踏青のはしめにしくはなし、唐人の詩に、詩家清景在新春、柳嫩鶯黄緑未勻、若待上林花似錦、出門皆是看花人、
- 9 玉蘭は春分の頃、百花に先立て咲出し、殊に花形も快活なるものなり、（5ウ）世人この花、紫薇、芭蕉、すろ、を寺めくの唐めかすなといふは笑へし、僧院にも唐山にも尋常の草木有ものを、
- 10 辛夷は、花状玉蘭より劣りたれとも、芬芳はまた玉蘭の及はさるところなり、王右丞の辛夷塢さそと思ひや

- る、某侯の山莊に、合抱にして天を挿「むはかりの一もと」叢竹雜樹の中に有、(6オ)「予其主人に」、竹樹を剪伐して一亭を置るへしと慇懃す、程経て又その莊に罷りしに、猶蒙密の中にうもりておしむへし、
- 11 彼には春陰といひ、我には春霞といふ、春の日の晴わたれるにもなく、又くもりふたかりたるにもあらで、其あはひえも言しらす長閑なる所あるをいふ、(6ウ) 古人はいかにしてかゝる所よくこまやかに心をつけてめて初しにや、今の人はいかに粗心浮氣にて、いたつらにもを見過すにや、
- 12 年久しく京に在勤せし人のいひしは、吾妻は霞と霧とのけちめなく、時雨も村雨も同じやうなり、春霞「の匂ひはた」とへていはんやうもなし、(7オ)「時雨は日はて」りなから、所々村立たる雲の行通つ、雨降出其雲行過ればあとかたもなく、時の間にいくしくれもして、見るかうちに海山のけしきうつりかはる所いはん方なしといひき、辛末のとし西征の路次、折しも暮春に入洛せしか、霞のけはひいひ名つくへきやうもなく、遠山を望むに瑠璃屏をへたて(7ウ) 見る如くなりしにぞ、其人の詞を思ひ出しき、帰路播撰の間にて秋霧に逢しか、遠樹の隠見せるさまこ、に見しとははるかに異にて、いかにも賞すへきものなり、これらのたくひ、上方の地を経されは古歌の意は解かたし、菊紅葉の秋の景物に入るも、上方の氣候にかきる「なり、こゝにては」初冬の景物とせされは、実(8オ)「にかなはず」、
- 13 凡和哥ほと風趣を得たるものはあらし、天象のみかは、多く春花の中にも、梅、桃、桜、梨、山吹、藤、つゝしなどを採り、さゝやかなる草の中にてすみれ、早蕨、動物にては鶯、雲雀など風致あるものをえらひて、おもたゝしく題とせし事にぞ、
- 14 歌題の其はしめ思ひよりしはすぐれたる(8ウ) こと也、早蕨、すみれなど心もつかぬやうなるものなれと

も、蕨の拳立たるは陽気発苗の姿、自余の草とは遙にかはりて、見所あるものなり、はた葦ほど少き花なければと、叢生して花開時は遠望しても、其紫の色目立て艶なるに、似るべきものもあらず、これらを見はしめしは感に堪たる事也、

15 「のとかなる日に」、柳絮の吹ともしらぬ風の前を（9才）「ゆらくと舞」渡り、池水に落入かた見れば、又おちもせず、や、久しくして水に浮へるは、春景悠長をきはめたる風趣なり、楊花無力点清池とは宋人よく作りぬ、無力の二字何限の意をふくめり、

16 絮をふく柳は別種なり、又木老されは絮少し、すへて柳は種類多きもの也、葉の大小、條のふとほそ計にもなし、春のはしめ、葉（9ウ）より先に花出るは下品也、葉出し後に花出るを上品とす、予柳数種を植置けとも、來人にそれを見分るもの絶てなし、尾花の色も数種有、これも賞する人まれ也、世の中は桜草、花菖蒲、瞿麦、牽牛子などの品類のみ日々に多し、

17 花の品類もほどあるへし、たとへは梅は白「薄紅真紅、帶」の紫緑、桃は白くねなるの（10才）「濃淡、又日月」桃、桜は白淡、芽の赤きとみとりなるなどにて事たるへし、いさ、かの異同をもて品類多きを戦すはうるさし、

18 数畝菜花のかたはらに桃花あるは、城市へたてぬ所にて、田家の風韻有ものなり、桃は梅桜よりいやしけるなる花なれと、亦かくまで野趣有ものはあらし、

19 桃はやく木老ひ膠出て、終に枯槁（10ウ）し易きもの也、かゝるよはひ短き木の千歳も保つといふか、仙境の験とせしゆへなるへし、よしもなく仙物とおもふは吞棗とやいはむ、

- 20 花はすへて重辨より単辨まされとも、八重山吹の春の名残をと、めたと、八重桜の若葉の中に残れるは、折にあひてすてかたし、まして単の遅桜はこと更「よし、又藤花」の八重も紫ふかくてよし、(11オ)
- 21 「桜は我国の」名花なり、唐僧叡亭の東来始見此花奇、無限春叢讓白眉と作りき、しかるに桜、桃、垂糸、海棠をもて強て充れと、実は別物にして、それらより風韻はるかに優りたるものなり、但し盛の短きはうらむへし、またさかぬ間に彼岸桜の魁するも、又散たる名残に桜草の殿するも、花形の似たる(11ウ)と思へはまた賞するに堪たり、彼岸を小桃に充るもをしあてにて別物なり、
- 22 花開きて風雨の多きのみかは、月の夜ころに花盛なる春も亦稀なり、長き春日にみあかぬ花を、更に月前にめつるほど楽しき事はあらしかし、又桂花も中秋に際会せる年たま〜「なり、花さへ時は」得かたきをや、(12オ)
- 23 「花のみか、紅」葉の頃も晴日少きをむかしより歎けとも、実はさあるへき定理にそあれ、天地陰陽の氣一変する時機なれば、陰晴もさたまらぬはつなり、うらむへくもあやしむへくもなきことなり、されとそを興して理外にいふは、詩歌の風趣也、
- 24 古人の花に名つけしは雅俗ともみな採るへし、なてん、車返し、塩かま、ろうま、有(12ウ)明、うはなと、ひとつとして心なきはあらず、おそく咲をいせ桜といふは、伊勢は尾張に近ければ也、今人の花に名つくるは、源語謡曲の名なともて妄りに呼たくひ、いかなる心とも解かたし、世の中それにて通用するも又いかにそや、
- 25 諸花の中、桜ほと一重にてよきはなし、「しかるを世人」は八重を貴ふ、菊はかさね(13オ)「厚きほと」美

観なるを、近頃はうすきをもてあそふ、いかにしてかく反したる心やとおもへと、なか／＼我心の世に反せしなるらめ、

- 26 つしまは我国をはなれて、却て韓国に地脈のつゝきたる形勢とみゆ、それを我版図に入しは国力の強きによるなるへし、さて草木の如きも、(13ウ) 正朔に従ふものとおほゆるは、桜の其土よろしきをみるへし、泰山府君の種も、此国より出始ほと此花榮ふる地なるに、間近き韓地には単葉の山さくらさえ活かたしといふ、
- 27 対馬宗侯第宅正門にかよふ一條の広陌に、桜を並木に植たり、本邦の「名花をも」て韓人に誇る設け、いとこゝろ(14オ)「ある事に」そ、いつの代に植初しけむ、
- 28 古人桜と桜桃の異種なるは知なから、花葉実の相類する所あるをもて、桜字を用ひ初しなるへし、是先哲の漢字を仮借して活用する妙所なり、
- 29 落花を雪にもたとへたるも、昼はさまでとも思はれず、一年弥生弓張月の頃、木のもとへ落花をふきよせたるを、何こゝろなく(14ウ)まとの中より見出したる時、真に雪かとたとられしことありき、
- 30 鶯を黄鳥黄鸝にして詩に用るそよけれ、さにはあらて報春鳥なりなど、いひあらそふは笑ふへし、本草家葉性せんさくの時はさもあるへし、詞藻の上にはいらぬことなり、*広本この後に「杜鵑も唐山のとは別也」の一文がある。
- 31 「秋の渡り」鳥は声するるとにて風致(15オ)「に乏し、春」鳴小鳥はいかにも長閑に聞ゆるものなり、閑坐聴春禽といふ唐句は、何の事もなきやうなれと、殊の外静趣を解したる句なり、
- 32 花時より緑陰をよしとすること、六朝の詩にはしまり宋明にもみゆ、我先輩の歌仙、新樹勝花といふ題を設

- しは、暗合してよくも思ひよりけり、花散し（15ウ）後、日に添て青葉ふかく成行、牡丹、藤、せうひ、つ、し咲つ、きて杜若にうつる頃ほひは、けに一年の中好時節とやいふへき、花は風雨のみまた咲ぬまは日ことに待、盛になれはこゝろあはた、しく、其うちにはや散をかこつやうになりぬめり、新緑のほとは日もますく「なかく、心も」いよ、長閑に、跡先をかうか（16オ）「ゆる心も」なく、日かすあまたに景物をもてあそふへし、
- 33 空うちくもり、雨もよひのけしきなるは、おもしろからぬものにて、人もかしらおもく、気ふたかること多し、しかるに卯月のころは、晴たる日より卯の花の宵うづことにいちしるく、雨もや、降来るかとうち仰みれば、折にあふちの花さき出したるなど（16ウ）時しり兒におかし、棟は花信二十四番の終りにて、緑陰のころ薄紫の色の艶にはあらぬものから、尤風情有り、木末高く咲出、花なき時なれば目立てみへ、かつ盛久しくよし、水木の花も田家めきたれと、新緑の中に純白を簇す、風致またすてかたし、大てまりますくよし、
- 34 「多雨の夏」は荷花おほく出す、はた盛も（17オ）「みしかし」、多旱年は花のほる事多く盛の間長し、一年此花のさかり凡二月はかりなりし事ありき、
- 35 百日紅は其名にそむかず、夏木立の中に紅をさらす事久し、秋ふかく花散し後、其莖を剪去るへし、さあれは年々に咲く、さらされは年をへたて、さく、たとへ明年咲とも少くして見（17ウ）るにたらず、くさきの花野鄙なるものなれと、其時にあたり外に白花なければ、しゐて園林を粧点する一つにあつ、
- 36 かうかの木の花うるはしきものなり、郊外のときなんと水辺籬落、思ひもかけぬ所に咲出たるめつるへし、槐花は見「所少なけれ」とも、落花のさま一風なるもの（18オ）「そ、花重」くして遠くへは散飛す、あつま

りてつもる処ほかに類すくなし、白詩に門外城西路、槐花深一寸と作りしは、いかにもよく心つきたること、その折ことにおもひ出らるゝなり、*冒頭「かうか」、「りうか」と読めなくもない。

37 夕かほの花は朝開て夕は萎む、古く歌に入たるものにもなし、源語に、五条わたりの小家かちにむつかしけ(18ウ)なる所の、むねくしからぬ軒のつまに、はひまつはりて咲たるとあり、名花としたるになく、其名に興して一時仮借せしめてなり、後人夕かほを名花の一とあやまりとめて、黄昏にめつる景物とこゝろ得るほと、笑ふへき事はなし、是よりは夏の夕に迫りて開き、一種仙風「道骨の」趣あるは天花なるへし、これを(19オ)「賞すること」をしる人なきは、いかにそや、

38 六七月の交のことなりし、晴つゝきたる暑さたふましかりし夕へ、雨いさゝかふり、やかてやみし折節、空かきくもりそことも分ぬ計なるか、日頃になく風涼しきのこゝちよさに、たか庭かたしき、はしゐしてありしに、屋隅の燈庭の松にうつりしかは、今年の新葉のみ色しろくみへて、さなから(19ウ)初雪のみ葉につもりしおもかけせり、思ひもかけず夜雪の景をみるやうにて、いと、涼さもそひておほへ、夜久しくなかめぬ、こは空のくもりたると、松葉に潤のふくみたると、新葉のまた老ぬと、ともし火のへたゝりうつりしとの、四つ相合されは此景をなしかたし、又いつの「としの冬」か春かは忘れぬ、夜いたくさへ(20オ)「雪飛ける」半夜より、かせ南に成、俄にあたたけく又暁かけて北に吹かはり、ことにさへしあした、目さむれば木葉の音からくゝとさへたるをとの常ならずおほへて、やりとあけみれば、木々の枝もはもひとつくゝに氷もてつゝみたらんやうにて、風のまにくゝおのれと打あふ音のきよらけき玉佩にやたとふへき、やをら庭におり立、とき(20ウ)うつるまでめて、けうせるうちに、はや日かけさしのほれば、みるまゝに皆とけうせぬ、是もよひの

- 寒さに、雪いさゝか降り夜半の温気に雪とけたるを、曉風にて氷らせける也、かゝる時氣に逢されは、此景ふた、ひ見かたし、*「日頃」は「月頃」をミセケチで改む。
- 39 白鷺は水禽の中にも分て標格高き「所あり、飛」も立もあゆむも各みるへき所あり、(21オ)「詩にも歌」にも詠せしはむへ也、蒼鷺、朱鷺、鳩鶻の類にあらず、
- 40 夕立のあめ、満地の落葉を打てかまひすしき計なるは、いと雄偉愉快なるもの也、又秋の村雨のはらくと荷葉に音つれたるは、心も澄渡るやうに覚て、流に枕するよりも耳のちりを洗ふへし、又留得枯荷聴雨声は初冬蕭(21ウ)索の極なり、
- 41 萩といふ字を我先輩の製し出せしは、秌芳の中の冠絶なる心もて成へし、唐に其字あれとも義たかへりなと論す徒は、ともに語るへからず、榲字を正字通に載せし如く、我に製して彼に伝へしむへきなり、予新に灑字を製用せるも亦「この遺意」なり、(22オ)
- 42 夏「萩は」俗に近きものなから、其内に秋ふた、ひさく種あり、これは賞すへし、女郎花も早晩の二種あり、これらをえらはすして植る時は、花をみるのほと短し、
- 43 月は文月にみるを最上すへし、宋人の一年没賽中元節、正是初涼未冷時とはよくも言けらし、其時は昼のあつさたふましきに、夕くれより月吹出すかせの(22ウ)す、しきは、甦へる計のこ、ちこそすれ、
- 44 中秋まではなを家の横さまより清輝さし入て、夜ふくるまでもみらるへし、長月は露台か、さなければ庭におり立されはめてかたし、まして露氣ふかければ風引こと多し、予戯に言、十三夜は少年の月見とすへし、老者のめつる月にあらず、

45 一年「葉」月十二三より桂花綻ければ、(23才) 中秋はかならず盛ならんとはかりに、花は其時に当りしか、折しも陰雲ふかく、清光を遮りて興なかりき、春ことの花も弥生の上下旬に咲こと多し、たま／＼中旬に盛なれば、月下にみむと待ま、に、風雨にうははるる事も多し、世の中の事はかくこそ有けれ、

46 橋上は、四方にへたつるものなければ、眺(23ウ) 観いとよきもの也、華人の山水画に、はしの中ほとに屋を設けたるか多くみゆ、雅尚といふへし、国初に執権の人々、城門の橋に酒くみかはし、月見せし事ありと伝ふ、武弁の人々にてか、る風韻のあるは、性質の美に出しなるへし、今時口には風騷を唱ながら、こゝろにこれらの趣を解する人はなれなるにや、(24才)

47 秋の夜、浅部辺よりをそく帰りしに、彦根侯邸の門前に至れば、月真向にあたりて夜ふかく空すみ渡り、昼よりも南天限りなく広く見へ、大城土居の松風ふきあはするひまに、松虫鈴虫鳴しきりたるは、いふにもいはれぬ風情なり、やをら馬よりおり立、挟箱に腰うちかけて、しはしかほとやすらひき、所もえらはす景色を(24ウ) 添るは月と雪となり、又ある冬大城に登りしに、いさ、か雪飛しか、其日ことありてをそくまかんで出しに、諸有司はみなしそきはて、ものしつかなるに、雪はいと降しきりぬ、日ことに見過る楼櫓列松など、常にことなるけはひせしは、けに足ととまりし事ありき、又夏の夜、築地より帰るとてあひ引橋に至るほど、河中の(25才) 菰多かる所にて、水鶏のた、せし事ありて、しはし道にやすらひぬ、会心のところ遠きにあらずといひしも、むへなるかな、

48 秋夜、一俗来話してまかてとせし故、今しはしと留めしかは、首を傾て、虫の音宜し夜も更ぬらんいさと言て坐を起り、ときにとりて詞の婉約なるに感せしか、年月を経て今に忘れず、(25ウ) *「一俗」「まかて」

林氏遺草・広本では「一俗吏」「まかてん」に改む。「虫の音宜し」林氏遺草では「虫の音高し」、広本では「虫の声高し」に改む。

49 菊花、本邦にては白を愛し、唐土にては黄を尊ふ、二色とも此花の正色たるへし、其優劣いつれともいひかたし、

50 蔦もみちは、露しもの降かふらぬ間に、はや緑葉の中より一葉ふたはもみ出し、目をふるに随ひ次第にいろ深く、五色斑斕として、終にみな紅に成てちる、櫨、楓のみつるよりははるかに早し、木にては(26才)ぬるて早し、紅葉は楓、はし、は、そのたくひのみかは、衆木のさまく、色つきて、黄、紅、褐色、浅深、濃淡、いつれも見所なきはあらし、しかるを真紅なる計をめぐへきや、萩のはのまはらに口なし色なるも、道芝の葉先紅なるか夕日に打靡きたるなど、さ、やかなるさへいとあはれふかし、

51 人家の軒窓しとみより垣門まで、所せき(26ウ)計に蔦かつらのはひ、ろこりたるは、人をして幽邃寂寞の意あらしむるものなり、夏のころ花と実のをのれと落る音の雨に、たるも、しつかに涼しき心ちそする、

52 王世貞か学圃雑疏に、桂花の為に一林を置へしといひしは解趣の語なり、何の花にても多くあつてみされは、其風趣は尽しかたし、(27才) * 「王世貞」林氏遺草・広本では「王世懋」に改む。

53 昔九州の旅路、いつれの所にやありけむ、時は文月なりしか、路傍の塘数町の間、かるかや計生しけりし所有、見渡すかきり朝かをに打靡きたるさま、今も目に残るやうに覚ゆ、又陸奥に行し人いふ、佐竹秋田侯の封内に、足軽町のなかくつ、きたる所あり、其道の右も左も皆うつ木垣ゆひ渡せしか、花盛なりしに、黄昏(27ウ)しらぬほとなりしと南、亡友の河尻肥州、ゑそしまより帰りしとき語しは、何とかいへる河を舟にて下り

しに、半日計の水路、南岸の木柳の外なし、時は五月とかや、風絮雪の如くなりしと、嗚呼其地はしまりしよし、此景に目と、まりしは、肥州の外はあらしとそおもはるれ、

54 朝兎は、るりの色こき大りんよし、詩語に（28才）碧花といふむへなり、いにし年、もろこし漳州の種を得し事有、花の大き稀なることなりき、今は花の変色もさま／＼うるさき計成に、近きころ葵、楓、柿などの形せるをもてあそふは、あまりに新奇を好むの甚しきなく、雪もあまりふかくつもりて白尺（マ）する計つもりて白尺（マ）する計なるは、中々見所なく又あさきにて、木竹の緑あらは（28ウ）に、杳の跡真黒なるも興なし、宵よりしめやかに降出、つとめてみれば、庭の木こまやかなる一枝さへもあさやかにけちめみへ、松竹など雪を帯ながら、所々みとりをあらはしたるほどそよけれ、雪とても過不及にて中を得されは、見所少きをや、*「甚しきなく」林氏遺草・広本「甚しきならずや」に改。「白尺する計つもりて」は衍、林家遺草・広本にナシ。

55 花にかせを恨むのみならず、雪も風（マ）あらふきて、梢にやとり得ぬは興なし、（29才）此都は海ちかければ、や、もすれば風雪となり易し、山のめくれる処の雪見うらやまし、

56 雪みるにはよく其地を考ふへし、海川原野などの広き所はあし、予年若きころ、台のもととなる流を小舟に棹さししこと有、いかにも山陰の昔も思ひ出られつ、

57 雪夜にともし火のかけ、あかり障子にうつり（29ウ）てみゆるは、風趣あるものなり、鄭谷か雪屋夜深燈とは早くめつきていひしものと、又いしのとうろに火を点するもよし、されと其事するとて庭にあしあどつくるは、中々いとふへし、

58 雪のあした、旭日の映しやうにて、駿岳くれなるふかく見へし事、これまでふた、ひあり、薄紅の事は多く

- あり、是も雪の（30オ）晴るほと朝日のてり逢時、こゝにも又日と山の方位にもよりて違ふなり、すへて奇絶の景は数度逢かたきものなり、蘇詩に清景一失後難摹と言し類成へし、
- 59 月夜に不二山をみるは、霜月中旬のよく晴たる夜ならては見かたし、是も冬月のはれきはまるのみにてもなく、山に月をうくる方位あるなり、（30ウ）
- 60 園池に水鳥の多く来りあそふは、朝な夕な目を悦はしめ、心を娛しむるものなり、其鳥の中にも、友とちあらかふあり、餌をむさほるあり、ねたみふかき有、色このむあり、又いとむつまじき有、独りをのれのみかけはなれてあるも有り、是をみるさへ、おのつから優劣を思ふ心生すれば、鳥にしかさるをいかにせむ、
- 61 世のつねの鳥の声も、時としてことに賞す（31オ）へきあり、くたかけの暁かけてなくも、鳥のねくら行とて鳴も、等閑に聞すてかたきときあるもの也、鶯、ほと、きすのはつ音のみかは、
- 62 かまひすしき計にてよきものは、雲雀、かはつ、急雨の蕉竹うつ声、よからぬは蟬、くつわ虫、ねくらもとむる雀、からす、少くて聞所あるはうくひす、時鳥、雁かね、庭とり、多きはうるさし、（31ウ）
- 63 楊柳風、梧桐月、芭蕉雨、梅花雪とは、古人いかにもよく四時の清絶をつらねたり、
- 64 十四五年前の事なりし、庭隅に小室を作り、よもきあまた植て、蓬蒿中の三逕ともいはん如くせしこと有き、其折しも、かねてねもころに交りし某侯、遠つ国よりふみのたよりに近況いかにと問こしければ、其返しに、艾植しことをいひやりしかは、やかてまた文（32オ）来りて、よもきは春の芽出しのみとりも、よの常の草より見所あり、夏はたけ高くしけりあひ、かせのまに／＼葉のうらの白くひるかへりたるもおかし、又露しにも葉色かはり、実を結ひなからうらふれて秋風になひくも、霜にかれ行も、ことのさひたる姿にてむらく

立たるも、四のときのうつるに随ひ風情あるものなり、我すむ庭にも（32ウ）多く生れは、園丁に刈るを戒めて常になかむる事よ、と申来ぬ、いかにも此草をよくいひつくされたりと感しつ、

65 某侯をとふらひ其園池を連歩しなから、すへてのもの好みを語あひしとき、侯言（トク）には、世の中の作り庭、茶亭などのいとふへきはいふ迄もなし、近来王侯貴人雅尚の心得にて、植木屋百姓家の真似して補ひ（33オ）わひたること、思ふも、ますく笑ふへし、我らは納言以上の人の、幽棲か貶謫所かと思はる、作りかたこそあらまほしけれ、と言れしは、いかにも解趣の詞也と心に感しき、又亡友千本白玉は、古き絵巻もの、中にて富麗なる居室の造り方にはあらぬ、尋常家居の様を考へて一室を造作せまほしといひき、これもおもしろし、（33ウ）*「補ひわひたる」林氏遺草で「補理わひたる」、広本で「補理ひわひたる」に改む。

66 真の雅尚といふへきは、折にふれときにとりて、おのつからあふ所に従ふものなり、世の好事家と称せるともから、妄に古物を陳ね、あるいは舶来の玩物を列ぬるたくひはいとふへし、鶴林玉露山静日長の一段を人々もてはやし、画卷にさへせるもあれと、是もあまりにおもしろく文を書過して、自然の雅趣を得るとはいひかたし、（34オ）明季陳繼儒輩をはじめ、世の偽風雅みなこゝろに権輿（マツ）せり、往年柴野栗山（マツ）か羅景倫（マツ）の語を評して、隠者はもの静に事少きこそよけれ、あのやうにては忙に堪さるへし、と嗤ひけるは確言といふへし、（以下二行アキ）（34ウ）*「羅景倫」林氏遺草・広本で「羅景綸」に改む。

（後表紙・反古）春のはしめ残寒はけしく折々雪もふるとしにかはらぬけはひのうちにつとなく（以下空白）（35オ）

〈翻刻了〉

以上が、自筆稿全文の翻字である。その改行に準じて数え挙げれば全六十六則。「真の雅尚といふべきは……」という著者流の総論が末尾に置かれていることから、内容的にここで一応のまとめを付けようとした意図が感じられる。この六十六則を起点として、以後諸本が漸次成長していったというよりは、この初発六十六則の後に、ある時期さらに六十余則が付加され、計百二十余則の広本となって残ったということであった。その広本が作られる前に、息裡宇によって写されたのが九大本『林氏遺草』なのであり、この段階で自筆本に見られた誤記への、最小限の訂正も加えられたらしい（主な訂誤は翻刻中に示した）。その後、何者かによって一時に後半部分の増補作業が行われ、そこから派生したものが冒頭列挙したいくつかの写本として現存しているごとくである。したがって、この百二十余則を備える広本こそが、いわゆる「述斎偶筆」の完成形とみなすべきものである。う。

その広本系諸本の伝播をもう少し細かく見るべく、こころみに無窮会図書館蔵『蕉雨軒偶筆』の奥書・識語類を列記してみる。まずは「政ゆき」なる者による奥書。

此記は一時の戯にもし給へる筆のすさみなれば、冠山翁のほかいままた他人に示したまはさるよしなり、やつかれせちに公の遺草とも乞ひ求めるものから、裡宇先生みそかに示し給ひしを、そのま、謄写して公の雅懐

の世人に勝れたる一端を知る拠とする心になん

甲辰きさらき

政ゆき記す

甲辰は弘化元年（一八四四）。次に漢文の奥書が続く。

余嘗見某生説快烈林公愛枕艸紙徒然艸常置之座左暇乃更繙以自娛今觀此偶筆其属辞命意頗有相似焉者某生之言信矣癸丑六月

後学貝岱識□□

（余、嘗て某生が、快烈林公の枕艸紙・徒然艸を愛して常に之を座左に置き、暇あれば乃ち更に繙いて自ら娛しむと説くを見る。今、此の偶筆を観るに、其の属辞命意、頗る焉に相似るもの有り。某生の言信たり。癸丑六月。後学貝岱識□□）

癸丑は嘉永六年（一八五三）である。快烈は述斎の私諡。さらにその後、書写識語と思われるものがあった。

安政丙辰十二月以松波家蔵本写了 長田定規

丙辰は安政三年（一八五六）である。これらから、次のような写本作成過程が想像できよう。述斎はこの和文随筆を、親しい好学の大名池田定常（号冠山、因幡若桜藩主、一七六七〜一八三三）にしか見せることはなかったという。ところが述斎の著述を慕ってやまない「政ゆき」なる者が、当時ほとんど秘籍となっていたこれを、林樾宇に強く請うて借写したことが、本書の世に出る端緒となった。それは天保十二年（一八四一）に述斎が七十四歳で没し、樾宇が大学頭に任ぜられた後の弘化元年二月のことであったが、またこの時点で既に広本が成立していたことをも証している。その増補改訂作業がいかなる者の手によったのかと考えたとき、たとえば、広

本の前半部全体に僅かな文言の修正や補筆が散見されることからして、天保三年以後弘化元年以前のどこかの時点で、述齋自身かその身辺にいた者によってなされたであろうことは想像に難くない。釋宇から借りてそれを筆写した「政ゆき」についてはいまだ確定できずにいるが、諸状況から推して幕府御書院番の三島政行（一七八〇～一八五六）ではないかとみている。三島は述齋の命を受け、御書院番から地誌調所に出向して大部な『新編武藏国風土記』『御府内備考』の編集頭取を務めた、地誌方面での強力なブレンであった。弘化元年は三島退官後、悠々自適の時期にあたる。無窮会本はこの「政ゆき」写本から派生して、貝岱なる人物（未詳）が嘉永六年に写本を作り、さらに長田定規（これも未詳）が安政三年に松波家蔵本を写したということになろう。もともと貝岱と松波家の関係は不明。また、この無窮会本題簽にある「蕉雨軒偶筆」なる標題がどの時点で付されたのかも判然としないが、貝岱奥書中の「此の偶筆を観るに」なるくだりもあわせて、柳北の使った「偶筆」なる表現が、既に近世において本書にあてがわれていた傍証にはなるだろうか。

また国会図書館蔵『春初筆記』の場合も、やはりソースは「政ゆき」写本であった。国会本には無窮会本の奥書とほぼ同じ奥書を有するが（年記が「甲辰のきさらき三日」となっていて、やや細かい）、その後には「夢園のあるし」なる人物による書写識語と思われるものが備わる。

大学頭林衡主の世にぬけ出たるさえ有し事はいふもさらなれと、此一巻はけに仮初の筆すさみにもせられしとみゆるを、花鳥風月の真趣雅致さ、やかなるふし／＼まで、残るくまなく心と、められ、ねもころにまきつくされたるにぞ、花も実もあるみやひのほともおもひやらるゝ、おのれその風流心のしたはしきあまり、心しりの人々にも見せまほしくて、かくはうつしものしつるになむ、慶応三とせといふ年のさ月はし

め、蓼園のあるし（花押）

慶応三年（一八六七）五月初めの書写ということになるが、この国会本には幕臣で国学者の三田蓼光の蔵書印（「三多」方印）が捺されていて、蓼園主との関係が気になる。花押や筆跡の照合もせざるままの予断は許されぬものの、蓼園なる別号をもつ文人のうち、会津藩の国学者野矢常方あたりが想定されてよい。静嘉堂本『春初筆記』は国会本の書入れや奥書までも再現しようとした写本であるが、『静嘉堂文庫国書分類目録続』（昭和十四年刊）でも野矢を筆写者と明記している。

ともあれ、こうした好事具眼の士たちによって、主に幕府周辺で細々と写され、それほど広がりも見せず幕末に至った。御実紀編纂の命を、いわば家職として引き継いでいた成島柳北が「幼き時写し置」いていた「偶筆」も、百二十余話を備えたこの広本の方であつたらうことは、花月新誌に後半部からの抄出も多々あることで分かる。柳北は、佳品ながら知る人ぞ知るといった本書の存在を憾みに思い、明治になって自ら編める雑誌に、手持ちの写本から折々の季節や記事内容に合わせてあちこち摘出しながら、足掛け三年間、十九回にわたって連載を続けたのであつた（後掲《花月新誌・掲載号》）。

自筆本紹介を主眼とする本稿では、各条の注釈的説明は他日に期す。ただここで一例のみ挙げておけば、述斎の名高い「溼」字創出談が、自らの筆によって吐露されていることをはつきり確認できることである（本文41）。永井荷風が自らの小説の標題に用いた時の「溼」の字は林述斎が墨田川を言現すために濫に作つたもので……（『溼東綺談』『作後贅言』昭和十二年）はよく引かれるところだが、その拠り所は意外にも日ごろ愛読していた花月新誌ではなかつた。なぜならば花月新誌の本文には、41「萩といふ字を……」の条中にあるその結末の一文

「予新に澤字を製用せるも亦この遺意なり」だけが、なぜか欠文となっているからである。荷風自身が実際に典拠としたというのは、風俗画報の臨時増刊として出された『新撰東京名所図会』（「向嶋」昭和八年）、その『図会』のうち「隅田堤 上」（明治三十一年三月二十五日東陽堂刊）中の「隅田川の名称に用ゐし文字」の項に見出せる。そこでは、「述斎偶筆に云」として「萩といふ字を…」から「予新に澤字を製用せるも…」までの全文を引用し、「成島柳北の澤上仙史と称せしは。全く此に拠れるなり」と言い添えたのであった。すなわち『図会』の筆者は「澤」字創案の経緯を記すにあたって、花月新誌や養徳会本などの活字ではなく、欠文のない歴とした写本の「偶筆」を参照していたのであり、いわば『図会』記述の質の高さがうかがえる一事ともなっている。さらに想像するに、荷風がこの相磯氏所持の自筆稿に接していたならば、いかほど手の舞い足の踏むのも知らぬ思いをしたことであろうか。

本書は植物動物庭園気象等について枕草子風に綴られた感懐が多くを占めるが、またその中に知友の言行も交る。市橋長昭（仁正寺藩主）、河尻春之（旗本、肥後守、蝦夷地奉行）、千本白玉（旗本の千本居隆のことか）らを「亡友」と呼び、その生前の警咳を慕わしく回想するあたりに、やはりこの随筆が老境に入ってものされた感を否めない。特に市橋に関しては、その宴席に列したことが自筆本で「三十年前のむかしとなりぬ」とあって（広本ではそれがさらに「三四十年前のむかし」と変わる）、およそ天保期に入ってから記述であろうことを匂わせる。次々と世を去ってゆく親友たちの面影を、多くの花木園池への溢れる思いとともに文字に残そうとしたとき、述斎が用いたのは本業の漢文ではなく、実に簡潔かつ清雅な和文であった。和文ながら決して余韻嫋々とならないその筆致は、かえって対象をくつきり浮かび上がらせ、しかもその輪郭にさりげない光彩を滲ませる結果

となつてゐる。

述齋は本文中にも吐露しているごとく、儒学の指導的立場にありながら、自家葉籠中の漢詩文よりも、むしろ和歌和文の表現のこまやかさを勝れりとしていた。かれが好んだ小型の私家版によつて世に出た歌集『墨田川二百首』は、その一端であろう。では晩年に書き続けられたこれら長短の和文群も、それと同じく和歌的感興の凝つたかたちとみなすべきなのであろうか。この見方は半ば正しく、半ば事の本質を見落とすことになる。といふのは、述齋は当代和学者流にのつとつて漫然とこれらを書いていたわけではなく、寛政期あたりから新たな和文表現を模索していた形跡があつたからであり、終生書き続けたらしいこれらも、単に風流生活の産物というより、そうした文体創造の延長上に位置付けるべき、意識的営為と思われるからである。

幕府編纂物で述齋の建議にかかる『孝義録』『寛政重修諸家譜』『御実紀』等々、現代でも十分に有用な記録類が、すべて候体でない和文で認められていることに、我々はどう少し注意を払う必要があるだろう。『孝義録』には大田南畝や堀保己一、『寛政重修諸家譜』には堀田正敦、『御実紀』には成島司直といった、当時漢学に通じながら和文を操ることを得意とした妙手たちが拔擢され、ことに臨んだ。そこでは諸事実を忠実に伝えながら読みやすく、しかも俗に墮さない文体を工夫していたことは、南畝の『ひとと草』におけるあれこれの試行ぶりでも、間接的に伺える。^{*注3}そしてそれらすべてに、述齋の積極的な意向が反映していたのではないかというのが、

本稿の推測である。

それはたとえば、次のような事実にも透けてみえるのではないか。先年紹介したことのある資料だが、「は、その落葉」なる長大な和文（写本一冊）^{*注4}があつて、これは述斎の母で、岩村藩主松平乘蓋の正妻だった敬信院が亡くなったとき、かれが妹の服子はとりこに命じて書かせた、敬愛する母親（二人にとって実母ではなかったが）の行状記である。服子は国書唱歌に精通した才女であつたが（佐藤一斎『言志晩録』別存）、述斎は妹に母の行状を和文で綴らせようと企図した際、いくつかの執筆条件を課したと思われるのである。服子の粗稿が出来、述斎はそれを加藤千蔭の削正に委ねることにしたが、その際の添削依頼状が残つていて（国文学研究資料館蔵『は、その落葉』に付載）、中に左のようなくだりがあつた。

：一々実録ゆへに文には大に困り候由に御座候。併し又、文藻をおもにいたし候得は溢辞にも成り候に付、俗言同様の認方甚見苦しく、殊に書取かね候事、無拠造語杯も致し、彼是人にも示しかたきほとに陋拙恥入候旨、申聞候。（中略）俗語可成丈ヶ修辞有之様に、呉々懇祈候事に御座候。…

ここでは、執筆者服子の悩みを代弁する体で千蔭に伝えられているが、恐らくこれは述斎自身の感慨とみてよい。いささか舌足らずな文言を敷衍するならば、次のようになるか。——本来漢文における実録文体である「行状」を和文で記すのはなかなか困難な作業であつた。和文本来の修辞を使えば文飾過多になり、武門の妻女たるわが母の言行を写すにふさわしからぬものとなる。かといって俗言すなわち候文を使って書けば、これまた野卑に墮してしまふ。また本来俗文で使用する語彙を、典雅なものに変換するために、あえて造語をせざるを得なかつた箇所もあり、およそ人に見せるようなものになつていないだろう——。この書簡の別の条では「何之守

某杯と申様之称号杯、如何にて允当候半哉。是等は外文之心得にも御了簡承り度杯と申事に御座候」などと、これまた妹からの質問として、千蔭に見解を伺っている。この服子の成稿および千蔭の批正は、時あたかも『孝義録』五十卷五十冊が官版として刊行された享和元年（一八〇一）のことであった。

「は、その落葉」のみならず、この時期の述斎の思いを忖度すれば、各種幕府編纂物の企画を契機として、叙事に堪えうる新たな和文を創案しようとしていたとみるべきではあるまいか。当時実務文書の典型は、いうまでもなく候文である。これは余りに定型表現や特有の用語がありすぎて、却って実際の出来事各々の相違を反映するに足りず、細かいニュアンスが出にくい。かといって当代国学者たちの書いていた真淵流の雅文体では、和歌的修辭に富みすぎて回りくどく、これまた実相を忠実かつ簡潔に描写するには適さない。かといっていっそ漢文で表現するとすると、大陸的誇張や不必要な漢語への言い換えによって、ますます事実から遠ざかってしまう。

こうした難題を解消すべく、いかなる文体を用いることにしたのか。第一に、候文ではなく雅文体を用いるものの、枕詞、掛詞、縁語等の和歌的修辭は原則として使わない。第二に、和文だからといって漢語で簡潔に表現できることまで、いたづらに大和言葉に言い換えない。第三に、美醜、褒貶、善悪などの評言において誇張や文飾は極力避ける。実際に作成された多くの文章から抽出されそうなこれらの条件が、述斎の考えた新しき（叙事の和文）の要諦であったと思われる。その背景には『藩翰譜』や和文にやわらげた宝永令の「武家諸法度」等、新井白石による過去の遺業も多分に影響したに違いない。そうして考えてみると、この文法に立脚したうえで、さらに自らの趣味的かつ美的な境地の表現を彫琢していこうとした作物が、この一連の「述斎偶筆」ではなかったのか。花実兼備の新たな和文の方法を用い、その条件を逸脱せずして、いわば花のほうにどれだけ傾斜しうる

か、そのひそやかな試みだったように見えてくるのである。

〈注〉

- 1 古典日本文学全集35『江戸随想集』（昭和三十六年二月筑摩書房刊）解説「江戸時代の随筆」、のち『森銑三著作集 第十一卷』（昭和四十六年十月中央公論社刊）に収録。
- 2 述斎の子息たちは號（林裡宇）、耀（鳥居耀蔵）、燧（林復斎）等と、皆光の部首をもった文字の諱が付けられていて、いづれもが「ひかる」と訓んだ可能性があるが、ここでは父の身辺にいて校字編集等にあたっていた裡宇が最も相応しいと判断した。九大本の筆跡も、鳥居耀蔵や林復斎のそれとは相違するごとくで、仮名書きの例でいえば、北野克編『歴代名家短冊帖』（平成元年十一月三樹書房刊）所収、裡宇和歌短冊の書風に類似する。
- 3 久保田啓一「大田南畝『ひとと草』試注（一）」（鯉城往来5、平成十四年十二月刊）以下、現在に至るまでの連載において、各作品分析が続けられている。
- 4 宮崎修多「林述斎の母―『は、その落葉』翻刻と解題」（国文学研究資料館紀要第三十二号 文学研究篇、平成十八年二月刊）

*

*

*

以下は参考資料として、「述斎偶筆」広本の後半部にあたる増補部分の翻字、花月新誌の連載号、そして自筆本の書影を示しておく。翻刻の底本としては比較的本文の破綻の少ない国会図書館蔵『春初筆記』（写本一冊、三田葆光・大島雅太郎旧蔵本）を使用した。翻字要領は自筆稿と同じくしたが、【一】内は本文中での割書部分を示す。ただし煩を避けて丁付けは表示しない。またここでも便宜上、各条に洋数字の通し番号を附した。条の切れ目は概ね底本の改行に拠ったが、内容を勘えて従わなかった箇所もある。*以下に底本の主要な書入等を補記した。

《後半部翻字》

67 春雨のしつけさをめつるのみかは、秋の雨のしつかなるは、はるにまさりて覚ゆる時もあるそかし、月の桂の匂ひ過ぎ、残る暑も忘らるゝころ、木々はいまたみとりなからに色さひて、ところ／＼黄はみたるもましり、千草のはなはいろあせ、籬の朝顔日ことに花の大きさおとり、池の蓮葉かたてるに雨うちそ、きたるは、けに秋も半過たるけはひのさう／＼しさいと感する処深し、折しも大空に雁なきわたり、草むらにひるより虫の声々うちしめりて聞ゆる、いとあはれふかし、

68 雨のしつかにおとなふは茅屋にかきるへし、されと都城の住家は皆瓦屋に板庇なれば、雨の音高らかにかまひすしく聞ゆ、楽翁君はこけらふきの庇に土を盛て草を植られき、いとも／＼雨の静趣を得られし事なるへし、又常に見ても庇の緑なるは、おもしろからぬものかは、

69 大空高く澄わたり萩吹風もあらましくなりゆく頃、木々の上葉や、色つきたるしけみか中に、渡り鳥のこ、

かしこさまくゝのこゑして鳴かはし、うらふれたる草むらにむしの音よわりて、赤き蜻蛉の小さきかいくつともなく群かり、一方にむかひ高く飛行こそ、けに秋もすゑ野のけはひなりけり、

70 萩の葉は、露霜ふれは黄色になりて、枝まはらにすぎ風になひくすかた、殊におもしろし、花の時のみ賞すへきものは、

71 霜紅は西北によりたる高燥の地色よく、東南の卑湿によろしからず、柏、柞、檜、柿の類、その年によりて色のよしあし違ふもの也、ぬるてもしかり、是皆霜氣の所為なるへし、いつもおなしきは錦木、葛、櫨なれと、詳にすればこれらもとしくゝに異同あり、楓は去年色よきはことしあしく、されはとて今年うるはしからぬか明のとしすくれて色出ることもあり、一年あしとて其木草うとむへからず、

72 上方の紅葉は露霜ふるよりしつかに染はしめ、霜力つよくなるに随ひ、次第に色濃くなるま、盛も久しかるへし、この地は葉かるゝにのそみて色付ゆゑ、一夜の風にもちりつくすことおほし、それゆゑ遠望によろしくて、立より見れば色おとるなり、京の紅葉は遠きも近きも皆よし、これは葉いまた枯すして潤沢、紅緑のけしめまでこまかにわかつへきほとに染出すをもて也、こゝの紅葉は紙においてはむさくゝし、京のは淡彩にゑかきたらんやうにて、風韻ことうるはし、下葉の半を上葉の掩へるかあらはれたるところのみ、染たる其色のこきもうすきも天然の丹青筆なれば、此土の産のおよふへき所にあらず、昔每秋紙におさせてとりよせ、もろくゝの料に用ひき、

73 往年京に淹滞せし時は八月の中なりき、小倉山の麓は青葉なりしか、よちのほるにしたかひ、上葉のやゝもみ出たりとみるほとに、山頂にいたりつけは、上葉みな紅にて、木の半まで染かけ、下葉のみみとりを残せ

り、今三十年をすくれと、秋ことに心にうかはさることなし、紅葉を秋の部に入るは、京畿に限るへし、こゝにては冬の景物也、楽翁君のとしくためされて、紅葉の盛を小雪前後と定められしは、こまかに心をつけられし説なり、*底本は「紅葉を秋の部に入るは：」から次項にするが、今他本によつてこの条に合す。

74 もみち朝よし、夕ますくよし、花またおなし、又花紅葉いつれと低昂しかたけれど、紅葉は月前のみそかひなき、されは花に勝れりとするへきにや、*底本、「花に勝れり」の「に」右傍に朱筆「を欵」、「するへきにや」の「る」右傍に朱筆「衍欵」。また、欄外に「されは云々意得かたし誤写あるへし」と墨書。

75 花紅葉のみかは、海山景勝も昼間は見ところなし、朝暉夕陰氣象千方の八字、大小ともに通ふへし、これらの妙趣、古人皆早くいひ尽せり、

76 大木は移し難し、大石はうつし易しと古人もいひて財を費せは、いかなる大石も目前に移すへし、されは大石は雅観の爲ならず、富をほこるの料といはむも可なるへし、これらをもて人にしめす心のいやしき、たとふるにものなし、まして大石を転運する時は、はからす人を傷ふ事も出来る也、我遊翫をもて人を傷ふも、本意ならぬことなるへし、又掾先のふみ石をいと長くして誇りかまうくるもあり、もし長からて便よからぬ所ならんには、短きを二つ三つ繼て用はたりぬへし、明暦災後、大城庖所の棟の料とて、殊に長き材多らみ出しを、松平豆州【信綱】二ツに研りて用ひよと命せられしよしいひ伝ふ、豈有かたきことならずや、

77 むかしの質素なることは、今の世にいひ出る人も稀なるへし、京兆の金銀閣など室町家全盛の時造れしか、張付紙に金銀の箔押たるまでなり、庭石は細川、山名、赤松などをはしめ、当年大家の輩、各其領国より貢しものとして、今もその家苗をもて石の名を呼へとも、いつれもさせることなき石ともなり、方今都下の藝樹家に

たてつらねし価をまつ石とは、それよりはるかに雄大なるもの多し、是を買ひ集めは一日の中に、室町の園池よりも幾倍の壮観もなるへし、かくまでも世は豪華の風になりゆくものか、

78 玩物喪志の戒忘るへからすといへとも、物好といふものは人情おのつからまぬかたきものゆゑ、必絶事難し、よきほどに止る節をしらは、深き患にも至るまじきか、凡屋室器玩のうへにていは、金石をちりはめ丹青をいろとる類はいふに不及、近頃は京風を慕ひてやうなき所に簾をたれ、物品ことに流蘇を施し、今の家居に似つかはしからぬ様なるもうるさし、茶人は各おのか流義立し、たま／＼おもひよる事とても、つひに其区域をはなる、ことあたはさるも拙し、又読書人は間情偶奇奪天巧の類を清雅と心得、玩器も唐船齋来といへは貴重して、座右に陳列して娛み、或は西洋の器までも交へ用るは何の心ぞや、それより降りては農家或は藝樹家の風を学ひて風流と思ひ、甚しきは市井酒楼などのことくみゆる様にしなしたる、笑ふへく又歎すへし、わか希ふ所は質素にしていやしからず、古に泥ます、異国を慕はず、目をおとるかす事なきほとにてやみぬへし、

79 居室を輪奐し、獲かたき宝玩を聚るは財を費す、交を扱はず、人を会して日を消し、各種の雑戯を楽とするは徳を損す、色を好み、酒に耽り、膏粱に飽は、身を傷ふ、しかはあれと世の娯楽とするは、皆この窩窟を出る事能はず、予は風月園林詩歌管絃を以て畢生の楽とす、一は心身を養ふ、一は操行を破らす、一は貧しといへとも観樂足りぬへし、

80 園林の観は山水にくらふれば隘小にして、深く賞るに足らず、されとも官羈にて遠遊し難き身、又は年老勝負衰へたる時は、外にかふべきものなければ、やむことを得ざるなり、されは是もおのつから野趣あるやうに

してこそよけれ、世の勢家の池山の設けを見るに、木を作り、芝草を刈たて、垣を巧に結びまはし、石の燈多く並へたるなど、最いとふへし、それも主の好みにあらず、藝花人の意にまかせて作らすれば、いつかたもみなおなし様なる風致のみ多きは、見るもいとはし、

81 広からぬ園庭は、夏ことに刈こみといふて木々の枝の舒たるを剪伐せざることを得ず、さなければ、たけ高くなるまゝに下枝まはらになり、月をさへ、風も通はぬやうになるに、やむことを得ざることなれど、これか為にのひやかなる木の姿を失ふことまたおほし、就中柳はひろくるものなれば、いたく枝をからてはかなひかたし、又いくほともなく新芽生出るといたく萎れは、古人の秋柳を賞咏せし風姿をみることに難し、雪の積れる時になりても、糸みしかくてははえなし、明のはるの鶯黄色もおそくにほひ、彼といひ是といひ、柳の真趣はつひに失ふめり、されとしかせされは、そのあたりの木々これかために傷損す、予は垂柳を殊に愛して常におもふ、いと野広き所に柳あまたうゑ、四時の風趣をほしきまゝに見は、いかばかり悦意ならましと、しかれともいまた其地を得ず、

82 すへて景勝の眺観は、方位によりてよしあしあるをしるへし、朝は東より西、夕は西より東をみれば、いと幽邃をおほゆる也、南より北はいつもよし、北より南をみれば、遠き所も近くみえてよからず、とかく日景を背におふてみるそよき、

83 柳は水ある処ことにはえあり、卑湿を好むものなればおひたちもよし、山吹はもと山にあるものゆゑに燥土よし、もし水辺にうゑは耶陵ある処にうゑし、

84 卯月の末、俄に神鳴、夕立の雨ふりしきりしか、夕に至り雨をさまり、西の空におひかさなれるひまより、

入日のはなやかにさし出たる折しも、軒端の蕉心舒て旗なすはかりなるか、夕立になひきて皺紋を生ずれば、黄金の糸をみたして引たらむかことく、風のまに／＼種々の変状をなせしも、其うるはしさたとふる物なし、予年久しく蕉を愛玩すれと、かゝるけはひをみしこと少し、これ雨の名残と、風の力と、夕日の輝と、蕉の嫩葉と、偶合せる奇観なるへし、

85 或人云、池を穿ちて水草生へは、夏ことに地湿といひて、赤き色の水の鏡をおほひふたかる、日々に汲とれとも、明の日又もとのことしと、一とせ藕を植てよく生立しより後たえて、其患なく清きか、みとなるとなん、いまたこゝろみす、

86 雪は真白につもりたるをめつるのみかは、木竹のみとりみゆるほとこそよけれ、あまりふかくつもりたる時は銀世界となるまでにて、韵致なきものそかし、昔より春雨の静趣をめてこしなれと、長閑なる頃なれば、雨なくとも静かなる日多し、年や、暮なむとして、世の事繁く日を送る中に、一日風もなく、いさゝか六の花ちるよとみるに、やかてふりしきれば、すへて何となく物静になりて、聞なれし雀、鴉、にはとりの声までもなつかしき様におもはれ、世の中のさはかしさもうちわすれて、いつまでもなかめにあかぬもの也、又よひのまに吹あれし風をさまりて、常よりけにしつけき夜半に、いまたねもやらず、寒さはなか／＼ゆるひたるやうにおほゆるに、軒にそゝく音のあやしければ、窓押明てみるに、空はくらくて見わくへくもあらねと、燈か、けてよくみれば、いつしか木竹の枝先しろくふりかゝりたるは、いと興あるものにこそ、

87 予、年わかく世の外に遊び居し時は、雪降ことに騎行舟遊せざる事なかりき、就中墨田川には年毎のやうに行けり、ある冬の日、雪降出てやむへうもあらさりしかは、文字友の人々に使はせて、例の河辺に笛声をする

へとて来りてよといひすて、おのれ舟に棹さして寒芦多かる洲に漕よせて、雪見つ、笛吹すまして居たりしか、やかて契りし友とち、跡に先にその音をしるへにつとひ来り、ともに雪をめてつ、詩の歌のと興しけり、其末は隄に上りおほくの雪団を作り、ありあふものとゑるく声を出して、その雪団をまろはし落せは、おひた、しき音して遠近の河波に響きあひしは、いと雄壮におほえけり、今老後におもひ出せは、寔に一場の夢とはなりぬ、

88 晴雪の朝、旭日の光不尽の雪に映すれば、忽紅玉峰となることあり、こもその時の天気によれるものから、紅の浅きも深きも、折にふれて一様にはあらず、又其時刻いさ、かの遅速にて、其よきほどにあはされはかひなし、予この景をことに好みて、雪ことに心にかくれと、目立計に紅に匂ひし事は、終に三四回に過す、奇景はたやすく得かたきものにぞ、雪のあしたは必晴るものなりしを、近頃は雨になるか、あるはくもりなとして、快晴にあふことかたし、夕立の跡も空さりけなく晴かはれるか常なりしに、今はしからず、久かたの空さへ一定しかたければ、人生の変易はもとよりあやしむへからず、*「雪のあしたは必」以下、底本は次項。

89 楽翁君の雅尚、よのつねならさりしは人もしるところなれと、其中にも意表に出しは、玻璃板のいと大なるを雪屏風に嵌せられき、こは君もと多病にして、老後雪月をなかくめてらるれば、風寒に傷られし事はくなりしを防かむ為の料也けり、君は儉素を専として、いたく華侈をいましめられしか、雪月のためにかゝる物をさへ備られし事、いと貴からずや、

90 此君の一言わすられす永く心に記せしは、一とせ春の初め訪問せし時、常は吐哺して対面せらるゝ事なりしか、しはし程ありてあはれて、此ころいさ、か風のこゝちなるか、やかて梅さきぬへきほとなれば、予め養は

- んとて灼艾せしにより、しはしまたせしといわれき、又冬の初めに木草のはなしともせし時、予いふ、楡は大木をきりつめて芽をふかすれば、さ、やかなる枝いとしけくなり、落葉の枝先に別趣あるものよといひければ、おのれはいまた其木をさへ栽さりきとて、うゑて雪を積らせて見まほしといはれき、一時の詞なれとその風韻おもひやるへし、
- 91 馮夢禎か快雪堂日記に、雪夜に名画の山水幅をはしちかき所にかけて、雪に映してみし事を載たりき、故事を翻案しておもしろき心つきなり、
- 92 雪夜には、室中の燈火はうち消して、そともの石燈籠に火を点してみるへし、又夏の夜にともし火を椽先に出し、庭にあかりのさすやうにしてみれば、涼意いと深し、先年古画卷に【十界図】みし木燈籠を摸製して、それを用ひし事ありき、
- 93 夏のはしるに月なき頃は、かけ行燈もかきかたし、古き鍍灯籠は茶人も玩ふものなるか、掛所をゑらふへし、或人のもとにて来賓あやまちて頭をふれ、燈は地に落しか、頭を傷り血なかれて、興をさませしことありき、
- 94 石燈籠といふもの、今は庭の観美と奢華をほこる具となりぬるはいかにそや、しかはあれと、月なき夏の夜など、緑樹の陰に火影のほのめくはいとす、しく、雪夜もまた風趣を添ることあれば、一二はかきかたし、妄に壮大にして、或は彫鏤の巧を求る類は、えうなき事なるへし、又好古の弊にて、古き墓表に文字ゑりたるを用ふるは、あまりに心なきことならずや、
- 95 手水鉢の大きなるは夏によるし、朝々水をかふれば陶器にても銅器にてもよし、石製は洗淨するに便よからず、僮僕の怠りあらん時をおもへは、いさきよからぬ嫌あり、

96 石の手水鉢の今に忘れかたく覚ゆるは、城州一乗寺村のほとり、官の呉服匠茶屋なるもの、山荘に茸狩せむとて行しか、其亭舎の前に横長角の石盆あり、後ろなる山の水を笕にてとれば、しはしもをやみなく流れいゝる、盆隅に溝を穿ちてその水を吐すれば、舎前をめくりて涓流となり、其音琤然として耳をさますへし、かゝる清潔の盥盤を見し事前後なし、すへて京師はいつかたも水の便よし、うらやむへき土地なり、

97 飛石の多きもうるさし、されと湿地にはなくて不便の事もあり、雨後の履痕の深く乾たるもむさきものなり、随分低く地面とひとしきはかりなるはよし、年を経し庭はおのつから石のかたはら出さりて高くなるを、茶人わざと学ひて古めかさん為なり、老人の齒のぬけたらんことく石をすゑ、人をして失足せしむる患あるは甚あしく、橋は土を盛て草を栽たる、尤野趣あり、板にて作るは造作次第にて、よきもあしきもあり、竹製は巧に過ぎ、かつ蹉跌しやすし、石橋は老幼を誤る事あり、戒めて禁すへし、ある勢家の別荘に長八間の石橋ありときく、*「土のかたはら出さりて」の「出」右傍に朱筆「土欵」。

98 夏の居所は広かるへし、寐間もおなし、冬はこれに反す、浴室もおなし、

99 日あたりよき席は、ふすまを黒めなる紙もてはるへし、厠は白壁よし、蚊あつまらず、

100 あかり障子のこは尋常にすへし、巧にしたるほとくらし、天井は紙にても板にても黒きかよきもの也、又黒色は目を養ふとて、宋人机辺の屏障を皂羅もて張りし故事あり、

101 夜ものかくには燈檠二ツを少し遠めにおきて、其中に当れる所に机を寄てかくへしと、高橋越州伝へき、眼力老たる後の良法なり、又蠟炬は逆上するものなり、看書には膏油よし、鯨の純油尤よし、諸魚腴のましりたるは目を害す、

- 102 小瓶に花を挿せは一日のなかめなり、大なる枝は花かめに挿せは数日たもつへし、梅は十七八日たもつ、水力の多きによるなり、南天燭は冬より春かけてたもつ、実の紅なる頃、鶉啄ものなれば、截て挿瓶すれば久しく翫に堪たり、色つきても小寒の節に入らぬまはついはず、入節の翌朝はたちとこころに啄つくすも又奇なり、さりとて紙袋或は網なとかけて其実を護するものは、かの柑の木のまはりをきひしくかこひたる類ならずや、
- 103 花入の水を日ことにかふれば花の命長し、新水に換るとき、枝本を少しつゝ剪て新にすれば、いよ／＼長く保つ、古銅器最よく草木を養ふ、往年柳枝を挿置しかは、枝本に白根を生したる事ありき、
- 104 庭に池山の設ある席に山水の画幅をかけ、花をめつる席の瓶中に花を挿たるは、いかにもあるしの心おしはからるゝものなり、
- 105 端歛の硯は唐墨ならてはあはぬもの也、筆も唐製を用ひ、唐紙にかきるへし、さなければ毫はやくそこなふ、国産の石は墨もこなたの製造よし、筆紙皆同し、是を弁すして交へ用る時は墨色も発せず、筆も速に敗損す、
- 106 人生の楽は、我得手なる品と身分に応すへき事を早くはかりて、わかき時よりこゝろさせは、生涯の楽ありあるへし、明窓浄几は老境ふかく成ほど、いよ／＼楽意もふかし、武伎の工夫も筋力は衰ふるも、思を覃うる所は老後に自得あるもの也、これらすへて年少の時に勞せされは手に入らず、手に入り心に得るほとならされは、楽みにはならぬものなり、
- 107 詩歌はいふもさらなり、書画、糸竹、茶、香など各好む所に随ひてするとも可なり、但惑溺して人事をおろ

そかにするに至らざるやうに、みつからいましむへし、連歌など弄へきものにもあらず、俳諧は人から賤しくなるものぞ、堅くすへからず、申楽猶更なり、すへて楽みは心力を用ひ、みつから勞する事よし、たとへは山に登り眺矚を擅にせんとなれば、崎嶇險阻を経ずしては得へからず、詩にも歌にも堪能に至らんは、多少の辛苦を積されは至りかたし、管絃翰墨の類皆しかり、又草木をうゝるとても、子を下すより栽培の勞をつみ、花をみるにあふへし、其勞かへりて吾養となるなり、酒色に耽り、膏粱に飽き、室宇服玩の美麗をたのしみとするは、おのれ勞せざる樂みなり、勞せざる樂は必禍害ありとしるへし、*この項、底本は前条に続く。

108 俳諧はいやしきものなれと、昔芭蕉と呼ばれし翁の、名月や池をめぐりて夜もすからといふ句は、月を愛する心の深き感すへし、今の歌仙この奥趣を得るは、中々稀なるへし、

109 人の恒言に、曲藝小技は我なくさみまでの事なれば、心身を苦しましめて妙所に至るにおよはず、拙きに安んじて可なりと、いかにも聞えたる説なれと、其業を共とする中に入てあまりに拙劣なるは、自分も恥ぢ人にもうとまる、ものなれば、中々慰みにはなるまじきなり、たとひ造詣の深きを極めすとも、人並にはあるへし、まして人に超たる程に至らは、尚更たのしみも深かるへし、みつから汚下に安んずるは何のこゝろそや、

110 一歳三百六十日、天に風雨暑寒あり、人に事故疾病あれば、四美を併する事は、一とせの中いくはくもあるへからず、まして春秋の花紅葉の盛久しきも稀なれば、よく心かまへしていたつらに過すへからず、人生かきりあるをしらす、芳時を空しくする輩は、をしむへき事ならずや、

111 花開花謝二十日といふより、牡丹を廿日草といへは、さかり長き花とおもひ誤る人多きは、笑ふへし、其種の早晚あるゆゑに、開謝を併せは廿日計にもなるへき也、梅にせよ桜にせよ、種類の早晚をましへて植つれ

は、賞を長くすへし、霜楓とても亦おなし、予谷墅に各種の桜を栽て、花の時戯に、へときおそきたねをましへてうゑさらは花のさかりやみしかゝるへき、とよみし也、秋芳の中にも、萩に夏の末咲て、秋又さくあり、女郎花、尾花の類、みな早晩の二種あり、*「秋芳の中にも」以下、底本は別条とする。

112 冬景を荒涼なりとて賞する人少きは、仮山盆地にかきるへし、天然の山林年ふりたる所は、刻露清峭の景、別段賞すへき所あり、たとへは莊嚴剥尽せる古寺の如く、粉黛洗去せる美人のことく、金碧を仮らぬ水墨画のことく、鉛華を刊落せる老手文筆のことく、髮禿、齒脱、肉瘦、骨あらはれて、精神ひとり凜然たる、宿徳高士のことしとやいふへき、

113 仏桑、茉莉、夾竹桃の類は、花の落る時た、ちに蒂を剪るへし、さすれば花たへさるもの也、紫薇は花謝するを待て、其莖を皆截去へし、翌年の新条長しやすくして、必花も多くつく、捨置く時は隔年ならては見るへきほどの花出ぬもの也、

114 名所によみ合する景物は、必古き歌の例によるならひ、あまり拘束なる事とおもひるしか、西征の時、火の国に到れる頃は卯月なりしか、たえて郭公の初音を聞さりしかは、其地の人に尋ねしに、其名さへしらさりき、しかるに對馬に渡りて、我旅館有明山に向ひしか、昼夜となくをちかへり鳴声をき、ぬ、又宮城野のよみ合せに松虫ありて鈴虫なし、みちのく人にきけは、宮城野にかきらす、何方も鈴虫はなしといふ、それより名所のよみ合せ、みたりならぬ事を解したり、

115 雪行は広からぬ所なく、よし、広きは白尽するはかりにて見所なし、海辺尤よからず、角太河の舟遊よりお茶の水の狭隘なるに棹さしたる方、はるかに勝れり、晴雪は広きほとよし、

116 月夜に芙蓉をみるは十一月に限るへし、*底本、欄外墨書「月夜の芙蓉は、予も一とせお茶の水の隄上を過とてふと見出しことありき、頃は十一月半なり、かゝる事までよく、心をとめられしものにこそ」。

117 桜のまへのひかん、牡丹の後の芍薬、杜若の後の花あやめ、撫子の前の石竹、菊の後の寒菊、いづれも品格はおとれとも、又すてかたくや、

118 平戸の長村鑿と夜話の時、和歌の優美なるは詩に勝れる所ありといひしかは、鑿云、いかにもしかり、老杜か月中の桂を斫尽さは清光ますく、多かるへし、と作りしよりは、へ久方の月の桂も秋来れはもみちすればやてりまさるらん、とよみしかた、はるかにたちこえて覚え待ると即座にいひし、又近藤孟卿と語りし時、山月
は水辺と輝大に違ふといひしかは、其言下に孟卿か、へすみわひて身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月哉、との長秋の詠、今更おもひ出待ると答へしなど、はるかに年月を経ても今に猶忘られず、

119 瓶花は抛入といふはよし、各家の流義を主張して、枝をたわめわざと形を作りたるは、みるに堪へず、花を鉢に植たるは永く保てとも、席に置いて風致に乏し、瓶花は暫時の物なれとも、姿態いかにも清雅を覚ゆ、梅
花、水仙など、寒き夜の枕元に屏風引まはして其中におきたるか、夢覚る時其香をきく、いともく心よきもの也、世の習とて花瓶は床に置ものとのみ心得る人多かるへし、さあらんよりは、坐辺に近く列ねて目を娯ましむるにしかず、
欧詩の画盆圍処花先合といふ句の自註に、予嘗採蓮千朵挿以画盆圍繞座席と見ゆ、此好みいつか欧公に先んせられき、*底本、「花を鉢に植たるは…」以下別条とする。

120 人なき所に、とりちらしてありてもあしからぬものは、机のあたりの書冊、管絃の器、炉辺の茶器、鬪香の具ありて薫り残りたる阿加棚の花の枝、又棊をうちかけたる、花圃に栽培の具のちりたるもあしからず、但し

- 酒宴散して杯盤狼藉、酒気鼻を撲は、嘔噦をこそ生すへけれ、
- 121 花野の色を争ふ時は、虫さへ千種の声ありて、互に商音を奏するは、目に耳に秋も盛とおもはれ、松虫鈴虫はいふも更なり、くつわ虫などかしましき物から、秋の一景物には有けり、夏の蟬のみんなくと鳴時は、暑さも日にさへつよりゆくやうに覚え、うつくしよしのいそかはしきは、秋風いそく声とこそ聞ゆれ、こうろきは初秋に鳴はしめ、晩秋かけて次第に声よわりゆけとも、松虫鈴虫の絶る後に長くおとつる、もの、外にはあらしかし、又苗代の頃より鳴蛙は心よきものにて、古人両部鼓吹にあてしもうへなり、雨蛙またをかし、夏夜蝦蟆の池中に鳴は、夜熱を添るこ、ちしていとほし、
- 122 鈴虫と松虫とは、都下の人々互に名をとり違へたり、りんくと鳴くは松虫也、申楽謡曲にも其音をいへり、近頃人巧もて松虫を造り出す事、専ら世に行はるれと、野生より声音大におとれり、此事横瀬侍従貞臣初めたりときく、さすか歌仙のおもひよりにこそ、
- 123 虫声新造緑窓紗は、春夜温暖の景色なり、陰虫先秋聞は、夏夜の既に秋ちかく、や、涼しき風情なり、
- 124 春夏を隔つる垣根の卯花は、この時の物なれとも、尋常の種はよほとおくれてさくもの也、三ツ葉と称するものは、時に違はず真白に咲出れば、此種なかるへからず、
- 125 常盤木は、若葉ふくころ古葉おつるもの也、緑陰に落葉狼藉なるはいかにも似つかはしからず、いとふへきもの也、此時は園丁の朝清め一日も怠るへからず、又冬の落葉は折からのものなれば、むらくと散しきたるは、其まゝにして置へし、しかるを力を究めて掃尽すは、いと心なき事ならずや、いつしか春もくれ夏けしきになりゆき、木々はことくくわかみとりなるに、藤、さうひ、つゝし、八重山ふき、手毬の大小咲かはし、

柳絮は風のまに／＼ゆらり／＼ととひかひ、其すゑ池水に落、さゝなみのうへをはしりゆくは、いける虫のこ
 とく見ゆるも、風情あるもの也、杜若の紫も白きも、とり／＼時をえかほにほころひ、岸にはけんけ、しや
 か、たんほゝをはしめ、名もしらぬ小草さま／＼の色して、ところせきまでうるはしく、薬欄は花王を欺く計
 におの／＼色をあらそひ、かたはらの蝶舞、燕飛、うくひすの声おい行にうちかはりて、郭公の初音おとつ
 れ、誰はき、し、彼はいまたき、得ぬなといふも又をかし、垣穂の外は苗代のあさみとりなるに、蛙声遠近な
 きとよむなど、とり／＼清和の景物を尽したるは、桜の頃にまさりて心のとけて覚ゆへし、桜、海棠、桃、
 李、梨、牡丹などは盛の間みしければ、心あはた、しきやうなるに、此頃の芳菲は久しくたもつ品多けれ
 は、みるこゝろさへ待をしむ意もわすれて、いよ／＼楽しかるへし、

〈翻刻了〉

《花月新誌・掲載号》*洋数字は各号の収載条（本稿における通し番号）

第十一号（明治十年五月二十九日発行）* 5・22・25・30・11・41・49

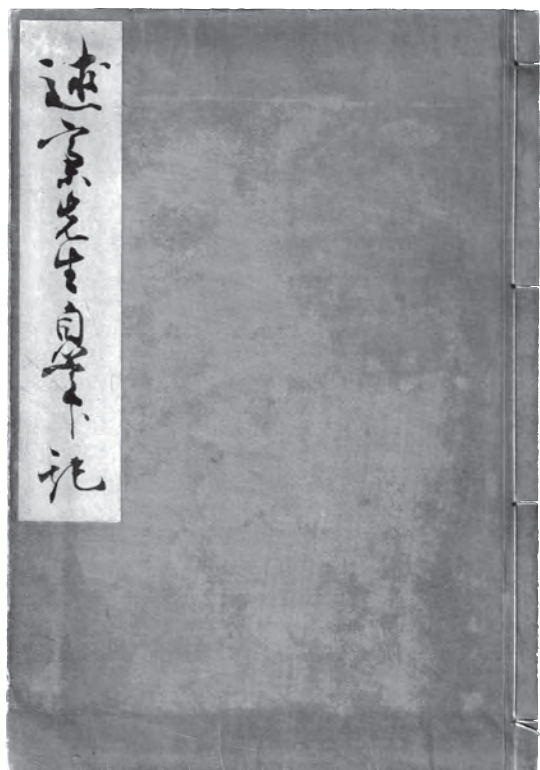
第十三号（明治十年六月十六日発行）* 37・54前半・74・88後半・104・91

第十五号（明治十年七月四日発行）* 13・29・48・92・43・44

第二十号（明治十年八月十六日発行）* 52・70・116・100・89・90・105

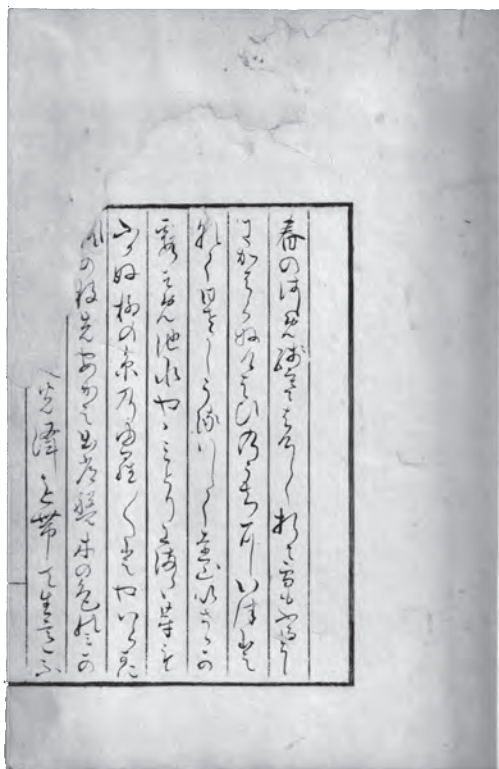
第四十号（明治十一年三月二十八日発行）* 106・107・108・109・110

- 第四十三号 (明治十一年五月四日発行) * 67・68・69・71・72・73
第四十五号 (明治十一年五月二十五日発行) * 64・65・66
第四十九号 (明治十一年七月十三日発行) * 114・115・117・118・119
第五十七号 (明治十一年十月十八日発行) * 76・77・78・79
第六十六号 (明治十二年二月二十三日発行) * 86・87・88前半
第七十二号 (明治十二年五月十六日発行) * 95・96・97・98・99・101
第七十五号 (明治十二年六月十七日発行) * 111・112・113
第七十六号 (明治十二年七月五日発行) * 32・33・34
第七十九号 (明治十二年八月十三日発行) * 3・4・7・8
第八十八号 (明治十三年一月二十三日発行) * 1・2
第八十九号 (明治十三年二月十五日発行) * 6・9・10
第九十二号 (明治十三年三月三十一日発行) * 12・14・15
第九十六号 (明治十三年五月二十五日発行) * 16・17・18・19・20・21
第九十七号 (明治十三年六月十二日発行) * 23・24・26・27・28・31

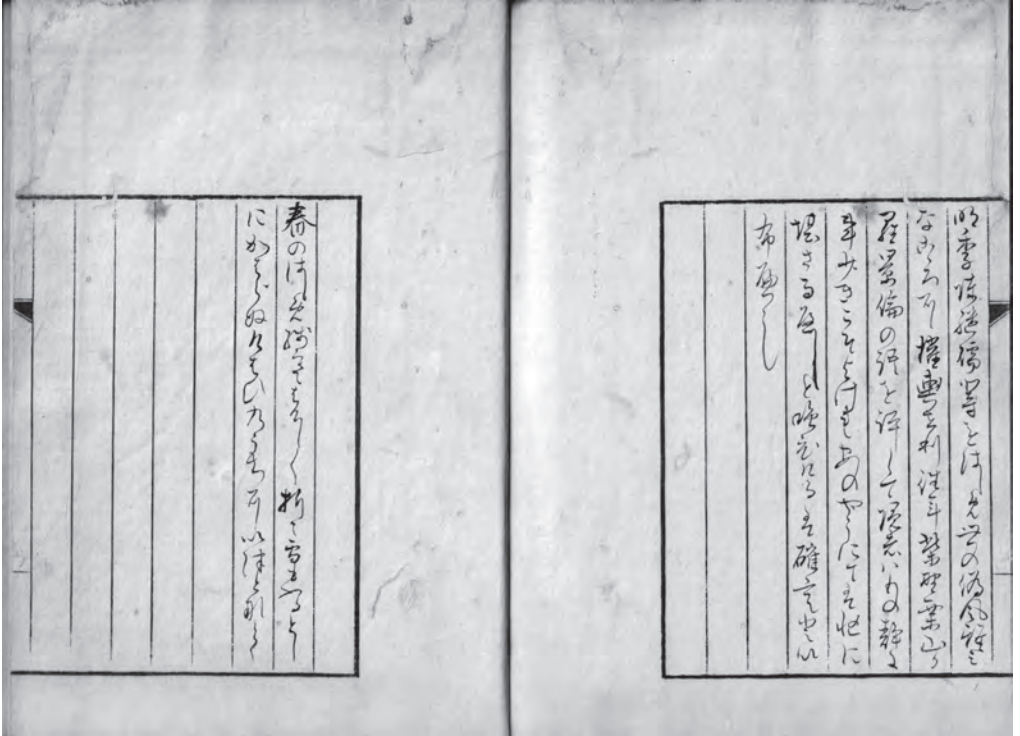


*写真1 表紙（後補丹表紙）

いわゆる述斎偶筆の自筆本とその展開



*写真2 本文冒頭



*写真3 本文末尾（右）と、共紙の後表紙（左・反古を利用している）

〔付記〕

かつて中野三敏先生の傘寿記念文集『雅俗小径』（平成二十七年刊）に小文を草した際、この自筆稿を紹介したことがある。本論文はそれと一部重複する記述のあることを諒とされたい。原本は、ご生前に「君が使え」といって手渡されたまま、先生は逝かれ、私の手元に残った。九州大学には先生の旧蔵書が雅俗文庫として蔵去されたが、日ならず本書もそこに併せ納めるつもりで居る。令和四年十一月晦、先生の三回忌も過ごせる日に。